銀鈴

第二十五號

明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日發行）
明治四十年九月二十五日發行

銀鈴

第貳拾五號

明治四十年
九月廿五日發行

社告

銀鈴社同人

『銀鈴』は突然、ご覽の通りの躰裁に更めた仍て、簡單に理由を述べる。

元來、雜誌の編輯には、表面に現はれない

多くの苦心と勞力とを要するものだ。投書を夫々區分したり、清記したり、社告も書く、新刊紹介も書く、字詰行數の計算、活字の植ゑ方、すつかり一部の原稿が出來上つた時、活版所へ送る。それが印刷して回るまでに、封筒などの準備を整へて置く。斯ういふ手數を、毎月繰返さねばならぬ、少しの油斷があつたら、最う直ぐ、遲刊だ、休刊だ。

以上は編輯の側に就いてであるが、それが營業部の方へ行くと、財政上の迫害と戰はねばならぬ。帳簿の整理や、廣告の交渉、印刷所との談判、いや仲々の騷ぎでない。

それも遊んでゐる人々の、慰みになら善か

らうが、相應に多忙な職業を有してゐる我等には、實に堪へ難いことだ。

と云ふ譯から、從來の紙面を一層緊縮して、可成我等の手數を省きたいといふことにした。畢竟、眞に我等と志を同じうする人々の、堅き結合を以て、文藝を樂しまうとするのである。我等は、社友諸君の溫情熱意に信賴して、遲まで奮鬪を續けたいと思ふ。誤解されては困るから、敢へて一言を叙した所以である。

○　中津佛丈

花火果て　露けき袖に　かご引けり
山かでのとびらにつのる野分かな

朝顔

すがはら人

「けうらに咲けど朝顔の
露のひぬ間の命こそ
はかなきものの極みなれ。」
やまひに惱みやつれたる
君、花を見て語ります。
さなりと吾もうなづきて、
花の榮華の夢に似る
哀れのさまにおもひ恍く
まみもたゆげに君はただ

空ゆく雲をながめつゝ、
そよ風わたるおばしまに
ゐかゝり默す。やゝありて
「はかなき花の運命にも
劣りし身よ」となげきます。

胸をいだけば、たへがたき
怖畏に息づくたましひゆ
涙ぞくだれはらはらと。——
あゝ君知るや不思議にも
こころの海は疾風して
波騷ぐなり。誰ぞかくは
愛別離苦のかなしさを
いと切にしも敎へたる。
しのびに泣けばさがにくや、
戀は惑に欲げ初めぬ。

小林愛雄氏足下

末　摘　花

文科大學生小林愛雄氏足下

足下は近者頻りに創作を諸種の雜誌に發表し給へり、吾人は足下が如斯努力をよろこぶ。然れども、聊か足下に苦言を捧げんと欲するの止みがたきものあり。そは唯一言にして悉きん、曰く、足下は足下の頗ぶる得意とす

る短歌の創作を斷念するか又は今少しく自ら顧みる所あらんこと是也

足下は、足下の短歌が言語道斷寧ろ嚴削するに若かざるの駄作なるに氣附き給はざるや。吾人は、足下が新体詩に於ける技巧上の躰面をも併せて損し給はんことを虞る。吾人後進の徒、豈に好んで言辭を弄せんや、偏へに足下を重んじ、足下を敬するの餘りに外ならざる也。至囑。

萬古青濛々

後藤藤朗

かたくなに何か憎まむ億刼の日も我泣くにあき足らぬ世を

片町や我も交りぬ密獵の壯語を聽くと女人の中に

漁士街ひねもす百舌のさへづりに似てあらそひぬ蜘蛛網をはる

梁の夜を語りぬ鍛冶のわらんべと臘虎の毛皮被たる男と

松本掬雨

いかづちやみ空の虹の七絃を一時に斷つとわが胸に似て

病みぬればいとよき夢も圓ならず捕へ去ねやと祈苦しき（病の床にて）

三　明　千　鳥

金斧もて石に刻める罪なれば千歳を經ともなどか消ぬべき

朝の雨はれゆくけはひ萬象を正しく見得る日のよろこびに（人に）

森　脇　桃　村

きりぎりす君にわかれて行く徑の石のもとより音にいでてなく

こは奇しき啞となりぬれ饒辯の子なれど君と逢見たる時

君見しは零餘子たゆらに滴しつ秋の日岡を越えてさす家

忘れじと甘き言のみ云ふゆゑに疑とよぶ鳥

つゞひ來ぬ

明　賀　溪　南

「君が髪」ひそかに呼びてより添ひぬめしひぬれども香をもとむる日

そよかぜの吹く日草摘むうれしさよならびて往かむ野のわが友よ（三明千鳥の君に）

菅　原　紅　雨

朝がほに細き雨しぬ草の家君とわかれし日をしのび病む

河　野　翠　瀲

君をおき旅だつごとし今われは心げさうに他念あらねば

薫園氏の詩

末摘花

金子薫園氏の最近詩集『わがおもひ』を評したる雜誌『帝國文學』記者の言。

(一)眞情を歌つてないことだ、いかにもわざとらしく作りなしたやうなものが多いことだ。(二)叙情の歌に必要な熱烈な感情を缺いでゐる、だから作が多く平板無味のたゞごと歌となつてしまふ。(三)修辭が拙い、語も豐富といふ云へぬ。(四)作者は「南洋」にも「南蛮」にも均しく無造作に「みんなみ」と訓じた、かくの如きは徒らに作者が文字に乏しきことを證明するものだ。(五)この二三百種に足らぬ歌のうちに北海道、琉球、南洋、印度、伊太利、和蘭のことなどを歌へるもの數種を算することが出來る、見もせぬものを想像に任せて歌に咏むのは眞面目な歌人のすることでない、かくる歌がどうして人を動かすことが出來やう。

小詩三篇

しちせい

○

藥湯の香にも得堪へぬ
衰へをいとかなしげに
泣く君に花を送りぬ

秋風の身にしむ頃を
わが君はなは病院に
はかなげに泣きていますや

○

近眼の髯美はしき
解剖の主任の君は

刀とりて胸に加へぬ

衰へし頬は青冷めて
万人にあゝ秀れたる
唇に血の氣凍りぬ

○

病院の灯は黄なり
蒼白の額たれて
ぶるぶると震ひ泣く

寂として更けし夜の
物の怪は忍びより
生命喰む時と想ひて

▲寄贈新刊　△あやめ(一の八)△藻の花(四の四)△朝虹(三の八)△白虹(三の四)△山鳩(四　二)△初雁(一の八)△みづゑ(二十八)△青葉(二の七)△八雲(一の四)△茶話會△涙花△朝日の光△白菊△かすみ△明ボノ

▲社告　△募集の俳句は次號に二回分報告する△本號分の原稿には次號へ廻したものが甚だ多い△最近入社の社友は服部紫葉長野溪月の二氏である△次號の原稿〆切は十月十日。

▲投稿規程　短歌長詩俳句美文評論何でも可い、併し短かいものでなくては困る。用紙は半紙二十字詰なら行數は搆はぬ

▲清規　社友は六ヶ月分誌代廿五錢を前納すれば銀鈴を毎月送る。面倒な規則は設けぬ。

銀鈴　三冊郵稅共十三錢六冊仝前金二十五錢
廣告料　一行十錢　一頁壹圓　半頁前金六十錢

明治四十年九月廿三日印刷
明治四十年九月廿五日發行

銀鈴第廿五號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
發行兼編輯人　河野岩雄
島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所　赤名活版所
發行所　石見國邑智郡田所村　銀鈴社

明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日發行）
明治四十年九月二十五日發行